

梶山女学園大学生生活科学部

○坂口 尚子 橋本 令子 加藤 雪枝

<目的>わが国は急速な高齢化の時代を迎え、高齢者が日常生活において気持ちを高揚させ、若々しい活力を与えるものにお洒落な装いがありその効力が認められている。今回は装飾効果のある模様を取り上げ、その被服着装のイメージを求めイメージに及ぼす要因を追求した。世代の相違によりそのイメージは異なるものと考えられ、3世代の層の被験者によりその結果を比較検討した。

<方法>70代、80代の女性2名のモデルを選定し、ブラウス姿、スーツ姿の合計4枚の写真を写場にて撮影した。これをCGに取得した。模様は水玉、花柄、ペイズリーである。配色方法は、基本色を黄、青、紫としこれに対して類似、対照色相関係になるように2色を加え、3色配色とする。模様の大きさを2段階に変化させ着装状態を144試料作成した。それをフォトカラーペーパーに印刷をした。被験者は学生、その母親の年代、高齢者であり、15形容詞対を用いてSD法による5段階評定を行い、因子分析、数量化I類によって解析し、高齢者被服のイメージに対する要因を分析し3世代を比較検討した。

<結果>因子分析の結果、3世代共に評価性、活動性、力量性の因子の3因子が得られた。評価性を高める要因として70代のモデル、配色は類似、基本色は紫、模様の大きさは小、ブラウス姿があげられ、3世代間で差異があるのは模様の種類である。活動性では基本色の黄、青、70代のモデル、模様の大きさは大であり、差異があるのは基本色、模様の種類である。力量性では基本色の青、スーツ姿であり、差異があるのはモデル、模様の種類、配色である。以上より、3世代を通じて抽出因子や影響しうる要因について共通点が多いが、3世代間の差異については模様の種類、基本色、配色が大きく関係している。